九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「俤や姥ひとりなく月の友」注解 : 『更級記行』の諸問題（下）

井上, 敏幸
福岡女子大学文学部教授

https://doi.org/10.15017/11910

出版情報：語文研究. 71, pp.40-49, 1991-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

「俤や姥ひとりなく月の友」注解

――『更科記行』の諸問題（下）――

井上敏幸

はじめに

『更科記行』の失敗と放棄の一つの大きな原因に、前半の文章部と後半の発句群とが繋がらなかったことがあげられることはすでに述べたことがあるが、[注1]それは言い換えれば、前半部の文章部が木曽路の秋を心から「尽す」[注2]ことについやされ、後半発句群は、つづめていえば「さらしなの里、おばすて山の月」を賞すること、「姨捨山俤や姥ひとりなく月の友」の一句を得ることに焦点があてられていたからである。さらに言い換えれば、それ故に『更科記行』の文章部は文章として完結し、姨捨山の句は俳文「更科姨捨月之弁」（『芭蕉庵小文庫』所収）を成立させたのだといえよう。しかして芭蕉は、こうしてできた二つの独立性の強い作品を、一つの作品にまとめるという作業を、ついに放棄してしまったのだと考えられる。

「更科姨捨月之弁」が俳文として完成された作品であるということは自ら別の一箇の問題として論じられるべきであり、いまは省略に従うこととし、ここではこの俳文を成立させた発句「俤や姥ひとりなく月の友」が、『更科記行』の全体の中で、あるいは『更科記行』後半部発句群の中で、作品としてどのように読まれるべきか、また、この句は、『更科記行』の旅の時点における芭蕉の発句創作上の如何なる問題を含んでいたのか、またその芭蕉の問題は、この旅以後の芭蕉の俳諧創作上の問題とどのようにかかわっていくことが予測されるのか、等について考えてみることにする。

注1　拙稿「『更科記行』の諸問題（上）」「香椎潟」第三十五号　平成二年三月刊。

2　『更科記行』本文の引用は、沖森本『さらしな紀行』（昭和四十二年十二月、沖森文庫複製）による。ただし、書名を『更科記行』と表記するのは、宝永六年刊『笈の小文』中の書き方に従ったためである。

一　詞書「姨捨山」

『更科記行』後半発句群[注1]の第五番目に置かれている「俤や」の句には、「姨捨山」という詞書が置かれている。後半発句群十一句中で詞書があるのは他に第十句目の「月影や四門四宗も只一」に「善光

寺」とあるのみである。両者とも著名な地名として付されていることは自明のことであるが、「俤や」の句の「姨捨山」の場合は、『更科記行』前半部の文章および俳文「更科姨捨月之弁」との関連を云々するまでもなく、旅の最大の目的であった月の名所姨捨山での月見のことが強烈に意識されていたことは間違いないであろう。

つまり、この詞書「姨捨山」には、単なる地名の指示の役割を越えて、俳文「更科姨捨月之弁」に記すごとく、「ことし姨捨の月みむことしきりなりければ」（『更科記行』冒頭部には「さらしなの里、おばすて山の月見む事しきり」とある）という、芭蕉の心からの願いが籠められていた。というよりも、このことを前提として始めて「俤や」一句の正しい解釈が導かれるといわねばなるまい。「ことし姨捨の月みむことしきりなりければ」という時の芭蕉にとっての「姨捨の月」は、貞享五年の夏の初めより待ちに待った八月の十五夜、中秋の名月であり、その名月を、月の名所の代表である「さらしな」、また、姨捨山の代表である「さらしなの里」の「姨捨山」において見る月のことだったのである。

芭蕉は、貞享五年二月中旬筆の杉風宛書簡の中で、すでに「卯月末、五月初に帰庵可致候。木曽路と心がけ候」と伝えており、その日程がのびのびになってしまった同年四月末には、瀬田の蛍見物に出かけ、

木曽路のたびをおもひ立て、大津にとゞまる比、先せたの蛍を見に出て

此ほたる田ごとの月にくらべみん　（みつのかほ）

と作品に更科の月を詠み込んでもいたのである。この芭蕉の更科・姨捨山の月に対するあこがれ、執着が、伝統的な月の名所、いわゆる歌枕に由来するものであることはいうまでもない。いまちなみに、『平安歌枕地名索引』[注2]に掲げられている「さらしな」（更級）・「おばすて」（姨捨）関連の歌を見てみると、前者は都合七十九首（更級・―川・―姨捨山・―里・―山）、後者は九十五首（姨捨・―久方山・―山）という多さで、まさに月の名所の代表であるといってもよい数量である。勿論、この数量の多さが芭蕉を「さらしな」「姨捨」へ誘ったといっているのではない。

貞享四年から五年にかけての笈の小文の旅における芭蕉の足取りが、もっぱら歌枕名所を尋ねる旅であったことは、すでにしばしば論じられているところであるが、[注3]笈の小文の旅で芭蕉が尋ねた二つの中心的歌枕、吉野・明石各々の月は、実は更科・姨捨の月と対比される形で詠まれることが多かったのである。

吉野と対比されたものに、

へにけりなことしも春をみよしののいまさらしなに秋ふくるまで　（秋篠月清集一九六八）

雪しろきよものやまべをけさみれば春のみよしの秋のさらしな　（同　二〇七八）

さらしなやおばすてやまのよはよりはよしののおくの春のあけぼの　（拾玉集　二八七二）

うれしきは花に風なきよしのやま月はくもらぬさらしなのさと　（同　四九七三）

があり、明石との対比において詠まれたものに、

さらしなもあかしもここにさそひきて月の光はひろさはのいけ　（拾玉集　四一〇一）

月はかなあかしのうらもさらしなもただみる人の心にぞすむ

（同　五九二一）

さらしなやあかしのうらもまだしらず都の月のかげぞのどけき

（露色随詠集　五九）

がある。ちなみに、笈の小文における芭蕉が須磨において夏の月を、「明石夜泊　蛸壺やはかなき夢を夏の月」と詠んだ上で、「かゝる所の穐なりけりとかや。此浦の実（まこと）は秋をむねとするなるべし。かなしささびしさいはむかたなく、秋なりせばいさゝか心のはしをもいひ出べき物をと思ふ」と述べたのも、秋の「明石の月」が心にあってのことであった。であればこそ一層強く、「姨捨山の月」を中秋の名月の折に見たいとする思いが強くなってきたといえよう。

また、信濃の姨捨山を姨捨山の代表と見る考え方も、

おばすてはしなのならねどいづくにも月すむ峰のなにこそありけれ

（山家集　一一〇七）[注4]

といった歌から十分に察知できることであるが、殊に『山家集』の歌の場合には、「をばすての嶺と申所の見わたされて、思ひなしにや、月ことに見えければ」との詞書があり、『山家集』を愛読していたこと、また、吉野訪問が貞享五年の春で二回目だったことをも考えれば、吉野大峰山の一峰伯母ヶ峰（一二六六・六メートル、吉野郡川上村）を、芭蕉が実際に自分の目で遠望したとも考えられよう。

それはともかくとして、「おばすてはしなのならねどいづくにも月すむ峰のなにこそありけれ」という西行の歌には、いま一つ別の視点よりの注意が必要である。それは、「おばすて」山とは「月すむ峰の名」なのであり、それ故に「月」が「異（こと）」に見えたといっているからである。芭蕉は、吉野ならぬ本命更科の「姨捨山」の、その「澄」み渡った月をとことん見たいと、この西行歌を思い起すことで願ったといってもよいであろう。というのも、芭蕉の月への執着の仕方に、西行の月への執着に似通った面があるように思われるからである。私は、やはりこうした西行歌が「俤や」の句の背景にあったと考えたいのであるが、このことは、後にまた改めて述べることにする。

注1　「あの中に蒔絵書たし宿の月」は、前半文章部と呼応したものと解して含めない。従って「桟やいのちをからむつたかつら」以下「吹とばす石はあさまの野分哉」までの十一句を、後半発句群と呼ぶことにする。

2　片桐洋一監修ひめまつの会編、昭和四十七年二月　大学堂書店刊。

3　堀信夫氏「芭蕉の名所歌枕観と芭蕉の連衆――『笈の小文』の旅を中心に――」『国語と国文学』昭和四十九年十月、その他。

4　引用は、日本古典文学大系29『山家集　金槐和歌集』岩波書店　昭和三十六年刊による。後章での引用も本書による。

二　解釈の屈折点

第一章において、「俤や」の句に置かれた詞書「姨捨山」をめぐって、古来月の名所姨捨山への芭蕉の執着のよって来たる所を考えてみたわけであるが、それはこの句が、そもそも月の名所「姨捨山」を詠みとろうとした句であったことを忘れては、一句の解釈自体が成り立たないということを言いたかったからにほかならない。

というのも、この句をめぐる解釈は、近・現代になるに従って、いま述べた前提を顧慮しないことで、芭蕉の創作意図とは大きくかけ離れた方向へ独り歩きをしてしまっているように思われるからである。そこでいま、岩田九郎氏の『諸注評釈芭蕉俳句大成』[注1]でもっ

て、その変化の様子を確認しておくことにする。

通覧してみれば、解釈の屈折点が「評釈」（内藤鳴雪著『芭蕉俳句評釈』明治三十六年刊）と「講義」（角田竹冷外十余名著『芭蕉句集講義』明治四十年～大正四年刊）との間にあることが、容易に理解される。

鳴雪は、「天には月が照らしてゐる。地には山が聳えてゐる。其山は自ら月の友となってゐる。月の友なる山は姨捨山ぢや、其趣恰かも姨が一人で泣いてゐる俤ぢやと歌ったのである」との解釈をしているが、この解釈はつづめていえば、

姨捨山の俤は、姨がひとり泣いている姿であり、その姨捨山は月の友となっている。

というものである。

明治以前の注釈書類は、「吐句解」（東海呑吐著『芭蕉句解』明和六年稿）の「姨捨山は月の外に友はあらじ」、あるいは「蒙引」（衛足杜哉著『芭蕉発句蒙引』寛政年間成立、享和元年刊）の「ひとりなく姨の俤を今宵の友とすとは、山の哀、月の悲しさの述ぶるに詞なさを形容し給ふ也」といった解釈に見られるごとく、基本的に鳴雪の解釈の枠内にあるといって誤らないであろう。

対して、「講義」の麦人が「其捨てられて泣いてゐる姨が俤に立って見ゆる様なといったのであろう」という解釈を示した以後の解釈は、現代に近づけば近づく程、初五「俤や」の「俤」は、芭蕉の心に浮んだ姨捨伝説の主人公である姨の俤、芭蕉が見た幻像としての姨の俤を詠んだものだという解釈の傾向が強まってきているといって間違いないのである。

「句集」（樋口功著『選評芭蕉句集』大正十四年刊）は、「捨てられた姥が山中に一人月影のみを便りとして泣いてゐる、その俤よといふのであろう」と解釈し、「句抄」（百田宗治著『芭蕉句抄』昭和三年刊）は、「孤然として佇立する寂しい月影の幻像を見出すやうな気がする」といい、また、「石新講」（服部畊石著『芭蕉句集新講』昭和七年刊）は、「姨がひとりで山中に泣く当時の俤が髣髴として眼前に浮ぶ、今宵この月に対するにあたっては、其姨が我が心に於ける月の友である、といふのである」と述べている。岩田九郎氏の解釈も、「目の前にはおのずから昔月を見てひとり泣いていた姨の俤が浮かんで来る。その俤を今宵月を眺める友とすることだ」も、明らかにこの傾向をまとめたものであるが、その岩田氏が最後に、「解にいろいろの説が出て、難解となっている」という言葉を添えている点に、実は問題がひそんでいたというべきであろう。このことは、「講義」の麦人が、「姨が俤に立って見ゆる様な」と、心象としての姨の俤説を出したとたんに、「解からぬは月の友の座五の詞である」といっていた問題に他ならなかったからである。私には、どうやら心象・幻像といった傾向の解釈には大きな無理があったように思われる。

我々は、芭蕉の創作意識がどのうよなところにあって、この句でもって芭蕉は何が言いたかったのかを、芭蕉の創作時点に立ち帰ることで、改めて問い直すことが必要な時点に来ているといわねばならないであろう。岩田氏の『諸注評釈芭蕉俳句大成』「諸注」の冒頭に掲出されている其角の『雑談集』の文章を正確に読み解く作業からやり直す必要があったのである。

注1　岩田九郎氏著　明治書院　昭和四十二年七月刊。

三　『雑談集』の記述

其角の『雑談集』の記事[注1]は、

翁、北国行脚のころ、さらしなの三句を書とめ、「いづれか」と申されしに、「俤や姨ひとり泣ク月の友　といふ句を可然に定たり」と申ければ、「誠しか也。一句、人目にはたゝず侍れども、其夜の月の天心にいたる所、人のしる事少なり」と悦び申されけり。されば友吉が、

さらしなの月は四角にもなかりけり

といふ句は、武さし野の月、須磨・あかし・絵島にかけても影同じ。さみだれにかくれぬ橋、いかでふみたがふべきや。

というものである。「北国行脚」は、北国西街道（善光寺街道）の旅、即ち更科への旅をいっている。「さらしなの三句」は、現在のところしかと定めがたい。[注2]「さみだれにかくれぬ橋」は、本文の前条に取り上げられている芭蕉の句「五月雨に隠れぬものや勢田の橋」をさす。この文章の主意は、芭蕉から三句のうちでどれが良いかと問われた其角が、「俤や」の句だと答えると、芭蕉は本当にそうだ。句は人目に立たないけれども、といって悦んだ。どうして私が見誤るようなことをしましょうか、というものである。そして、芭蕉の言葉、「其夜の月の天心にいたる所、人のしる事少なり」が、『古文真宝前集』五言古風短篇の、邵康節の「清夜吟」、

月ノ天心ニ到ル處　風ノ水面ニ來ル時
一般　清意ノ味　料リ得タリ人ノ知ルコト少ナルコトヲ

の第一と第四句目によっていることは、既に指摘されている通りである。[注3]しかし、この芭蕉と其角の問答の意味するところが必ずしも明らかになっているわけではない。堀信夫氏は、かつてこの「月の天心にいたる所」は十分に注意すべきだとして、一句を解釈され、

「この句は月天心に至る夜更けの姨捨の旅情をいう句なのである。（中略）芭蕉は深夜山中に捨てられて独り泣いていたという姨の俤を偲びながら、心ゆくまで姨捨山の清光を幽賞したというのである。たしかに姨捨山の本意は深夜の月光を独り詠めるところにある」と述べられた。しかし、芭蕉の言葉「其夜の月の天心にいたる所、人のしる事少なり」は、決して「姨捨山の本意」を説明したものではありえない。堀氏の説は再検討されねばならないであろう。このことは後に触れることとして、そもそも芭蕉は「清夜吟」の詩句の引用で何がいいたかったのか、そして其角はそのことを何ゆえに即座に理解しえたのであったか。我々は芭蕉と其角が共通理解としたと推測される当時の最も一般的な解釈を通して、このことを確認することがまず必要であろう。

芭蕉等が目を通した可能性を持つもので、最も詳しく、また説明が行き届いているのは天和三年序刊榊原篁洲諺解の『古文真宝前集諺解大成』である。題名「清夜吟」の下に原注が、

言道之全体、中和之妙用、自得之楽、少モ有人能知此味也

（送り仮名は私に付した）

とあり、その注として、

月の天に上り、風の池を掃ふに因て、道の全体の明々たるを見、理の流行する中和の妙用を知、自ら心に会得するの楽にて、人の知り得ること少なることを吟じ叙られし也

と諺解している。芭蕉の言葉と比較してみれば、「月の天心にいたる

所」と「人のしる事少なり」との間に、傍線部Aが、すっかり省略されていることが知られる。続いて引用されている『性理大全』巻七十の文章でも、芭蕉の言葉の中間部には、B「人欲浄ク尽キテ、天理流行ノ時ナリ」という文章が略されていたのである。さらに詩自体に付された諺解を見てみれば、

天心は天の正中也。一二の句言ろは、一輪の明月冉々に天の正中に昇り、一陣の清風そよ〳〵と吹来テ、水面を掃ふ此時、上下一様の碧りにして、水月相映ズ。実に清潔なる光景也。是は人心清潔にして一点の蔽れなく、道体の天理流行するに喩る也。

とあって、やはり芭蕉の言葉は傍線部Cが全て省略されていたことが確認されるのである。そこで、芭蕉の言葉にA・B・Cの文章を加え、「清夜吟」の「月」を「姨捨山の月」、「水面」を「姨捨山」として一句を解釈すれば、

姨捨山の月が天の正中に昇り、一陣の清風そよ〳〵と吹き来って姨捨山を掃うこの時、上下一様の月光にして姨捨山と月と相映ず。実に清潔なる光景なり。よって道の全体の明々たるを見、理の流行するを知り、自から心に会得するの楽しみをうることができる。

ということになろう。

さらに『清夜吟』三・四句目の諺解に従えば、

天心の明月・水面の清風、その清冷まことに人の肌骨を潔くす。但、其境に至り、其景に遇はざれば清意を知がたし。故に少人ノ知ことを料知也。其本意は謂らく、人の胸中洒落にして一点の塵慾なく、従容として道にかなふ時、始めて水月の清意、我が心と一致なるべし。

と、その「清意」を知るために「その境に至り、其景に遇は」なければならず、その「清意」と自分の心とが一致するためには、その人の胸中が「一点の塵慾なく、従容として道にかな」っていなければならないと述べている。再びこれを芭蕉にあてはめてみれば、姨捨の明月と姨捨山の清風による「清意」を「肌骨」で感じるために、芭蕉は姨捨山に至り、姨捨の名月に遇わねばならなかった。そしてその折の芭蕉の心は、姨捨の明月と清風による「清意」に一致するために、「一点の塵慾」をもやどしてはならず、「従容として道にかな」っていなければならなかったのである。

結局、芭蕉が其角に対して言いたかったことは、この句は「人目にはたゝ」ない句ではあるけれども、姨捨の明月と姨捨山とが相映発する境地へ実際に行き、その境地にひたり、自分もまたその境地と一体化することで得ることができた句だったのだといっていたことになる。ということになれば、この「俤や」の句は『古文真宝前集諺解大成』の「清夜吟」をそのまま手本として作られたものだったということになりかねない。だがそれは、其角の文章がそう書き付けていたわけで、芭蕉句が必ずしも其角の理解通りであったのかどうかは、むしろ疑わしいというべきであろう。芭蕉がこの「俤や」の句に「清夜吟」にかなうものがあることを認めたことは事実だといわねばならないが、いま一つこの句が持っていると思われる側面とは何であったか。それは、すでに触れたごとく、西行の月の歌との重なりであった。

注1　引用は『古典俳文学大系10』集英社　昭和四十五年九月刊による。

2　注1の後注は、「あの中に蒔絵書たし宿の月」「いざよひもまだ更科の

郡かな」と「俤や」の三句をさすか、とするが、「いざよひも」「俤や」と「月影や四門四宗も只一」の芭蕉三句とも、「いざよひも」「俤や」の芭蕉二句と越人の「さらしなや三よさの月見雲もなし」の計三句とも考えられる。後考を期すことにする。

3　引用は、『漢籍国字解全書第十一巻』所収の天和三年序刊榊原篁洲諺解『古文真宝前集諺解大成』（早稲田大学出版部　大正十六年刊）による。

四　西行歌との重なり

「俤や」の句を、其角は『古文真宝前集』に収まる「清夜ノ吟」の詩法によって作られたものと読み、芭蕉もそうした其角の読みを悦んだことはいま見た通りであるが、芭蕉には、いま一つ其角には言表しなかったこの句についての発想があったように思われる。それは、西行歌の持つ独特の月の詠法に倣うところがあったのではないかということである。あるいは、其角と芭蕉の二人にとって、このことはあたり前すぎることだったために、話題になされることがなかったかとも解される。

以下、少しく西行歌における月の詠法を見てみることにする。

第一章では、吉野の「をばすての峯」を詠んだ『山家集』の歌、

イ　をばすては信濃ならねど何處にも月澄む峯の名にこそ有けれ

を掲げてその関連性を想定したが、『山家集』には、

ロ　くまもなき月の光をながむればまづ姨捨の山ぞ恋しき　（三七五）

観持品

ハ　あま雲の晴るゝみ空の月影に怨みなぐさむ姨捨の山　（八八六）

といった歌もあって、両者の重なりは、やはり考えてみなければならないように思われる。イの歌で気になることは、姨捨山というのは信濃に限られたものではなく、どこにもあって、それは「月澄む峯の名」だと詠んでいることである。この歌の三首前では、

大峯のしんせんと申所にて月を見て詠みける

二　深き山に澄みける月を見ざりせば思出もなき我身ならまし　（一一〇四）

と詠んでおり、やはり「深き山に澄」む月が、この世で一番美しいものだと歌われている。同じような歌に、

月前鹿

ホ　たぐひなき心ちこそすれ秋の夜の月すむ峯の小牡鹿の声　（三九七）

霧隔月

ヘ　立田山月すむ峯のかひぞなき麓に霧の晴れぬかぎりは　（三九九）

があり、さらに秋以外の季節においても同様に、

ト　神無月時雨晴るればあづまやの峯にぞ月はむねと澄みける　（一一一一）

チ　かみな月谷にぞ雲は時雨るめる月澄む峯は秋にかはらで　（一一一二）

と、秋と同様に「月澄む峯」が詠まれている。この西行における「月澄む峯」へのあこがれは、

リ　さとり得し心の月のあらはれて鷲の高嶺に澄むにぞありける　（八八九）

ヌ　雲晴るゝわしのみ山の月影を心澄みてや君ながむらん　（八九〇）

といった歌に歌われている、仏陀の永遠不滅の悟りの世界へのあこがれに支えられたものといっても誤らないであろう。

また西行は、この「澄む月」を風との関係で、

ル　月澄めば谷にぞ雲はしづむめる嶺吹はらふ風にしかれて　（一一〇六）

ヲ　雲はらふ嵐に月のみがかれて光えて澄む秋の空かな　（三七四）

と、風に吹きはらわれて澄む月をも詠んでいる。「峯に澄む月」と、風に吹きはらわれて「澄む月」、その「澄む月」に仏陀の永遠不滅の悟りの世界「鷲の高嶺」を見るという西行歌の世界は、『古文真宝前集』「清夜ノ吟」の一・二句、「月ノ天ニ心ニ到ル處、風ノ水面ニ来ル時」のあの「清潔なる光景」、その「清意」の中に「道の全体の明々たるを見」、「天理流行する」を知るという構造と何と似通っていることであろうか。

また西行は、「月に心の澄み」ゆくことをひたすらに求めてやまない。例えば、

ワ　ゆくへなく月に心のすみ〳〵て果はいかにかならんとすらん

カ　世の中のうきをも知らずすむ月の影はわが身の心地こそすれ

ヨ　いかでわれ清く雲らぬ身になりて心の月の影をみがゝん

のごとくである。「澄む月の影」と「わが身の心地」との一致を求め、また、「清く雲らぬ身」となって「心の月の影をみがゝん」とする姿勢は、「清夜ノ吟」にいう、「人の胸中洒落にして一点の塵慾なく、従容として道にかなふ時、始めて水月の清意我が心と一致なるべし」という世界と、これまた何と似通っていることであろう。

芭蕉と其角は、この『山家集』における西行の月の詠法を承知していたが故に、「清夜ノ吟」をスムーズに持ち出せたのだといいたい程にである。少なくとも『山家集』を愛読してやまなかった芭蕉が、この西行の月の詠法を意識していたとはいってよいのではあるまいか。とすれば、西行の姨捨関連の歌にみちびかれつつ、姨捨山を徐々に強く意識していっただろうことも推測される。殊に、春の吉野において吉野の花を詠むことに失敗し[注1]、夏の須磨・明石に「いひ出べき物」もなかった芭蕉にとって、著名なる月の名所において、仲秋の名月をとことん味い、とことん納得のいく句を詠むことのできる最後のチャンスが、この姨捨山だったからである。このことは、芭蕉自身が夏頃から考えていたことだったのではあるまいか。

つまるところ、「姨捨山　俤や姥ひとりなく月の友」の吟は、西行の月の詠法あるいは「清夜ノ吟」の詩法に倣い、名月の夜、自ら月の名所に立つことによって、新たなる句境の達成を求めようとした一句だったのだと評してよかったのである。

注1　白石悌三氏「絶景にむかふ時はうばはれて不ノ叶」の意味」『語文研究』19号昭和四十年二月。

五　なぜ姥は泣けたか――結びにかえて――

この句が用いている姨捨伝説については、『諸注評釈芭蕉俳句大成』がまとめてくれているように、

姨捨山の伝説は諸書に見えるが、『大和物語』のが最も古いであ

ろう。同書によれば、更級に住んでいた男が、親代わりの姨を養っていたが、嫁が来てそのすすめに従い、姨を背負って山嶺に置いて帰ったが、折りからの明月に後悔して「我が心慰めかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」と口ずさんで、翌朝その山へ登って老婆を連れて帰ったとの伝説である。『今昔物語』や謡曲「姨捨」などにも取材された。この句はその伝説を思い浮かべて詠んだのである。

と説かれるのが普通である。しかし、『大和物語』のように男（甥）が姨を山に捨てて帰った後に、後悔して「我が心慰めかねつ」と詠んだのでは、泣いたのは男（甥）だということになってしまう。『今昔物語』の場合も同様である。また、謡曲「姨捨」の場合には、残念ながらそのことが分りにくくなっている。例えば、芭蕉と同世代の貞門三代を継いだ乾貞恕の『謡曲拾葉抄』は、『大和物語』に対比する形で『俊頼無名抄』を引用した上で、「今案、此説（俊頼無名抄）ハ姨が此歌をよめる也。又タ大和物語の説は甥（ライ）がよめる也。いづれか是（シ）なる」[注1]と判断をさけたままでいる。これは恐らく、貞徳の説に対する遠慮があってのことだったかと思われる。[注2]

しかし、文化年間に成立を見た『謡言粗志』では、袖中抄の説を丹念に引用した上で、

右此謡ハ是等ノ説ヲ以作ル也。但シ大和物語ト俊頼朝臣ノ無名抄ト聊相違アリ。此謡ハ無名抄ノ説ヲ以テ作ルト見ヘタリ[注3]

と判断を下している。曲の内容からみても『無名抄』がよいと思われるが、恐らく芭蕉も『謡言粗志』の判断に近い方向で読んでいたかと思われる。少なくとも謡曲『姨捨』を読んだかぎりでは、老女は山から連れ戻されることはないからである。とすれば芭蕉は、当然のことながら『俊頼無名抄』の伝える姨捨伝説を踏まえる、つまり、

只一人山ノ頂ニ居テ通夜（ヨモスカラ）月ヲ見テ詠メケル歌也。流石（サスガ）ニ覚束（ヲボツカ）ナカリケレバ、密（ヒソカ）ニ立カヘリテ聞ケレバ、此歌ヲゾ打詠メテ啼居（ナリ）ケル[注4]

の部分を踏まえることで、ようやっと「姥」を「ひとりな」かせることができたのである。したがって、以後のこの句の注釈では、『俊頼無名抄』を中心に用いなければならないということになろう。

ところで、「新講」で麦人氏が、「解からぬは月の友の座五の詞であるといった「月の友」なる語は、恐らく謡曲「姨捨」の「月の友人まどゐして」の「月の友」から来たものと考えられる。ただし、この「俤や」の句の場合は、「月の友人」から「人」を切りすてて、「姨捨山」を「月の友」としたのである。いま最後に一句の解釈を、「蒙引」を参考にまとめてみれば、

ひとり泣く姥の俤そのままである姨捨山こそが、今宵の月の友である。

というのが一句の基本だったといってよかったのである。

ところで、「はじめに」で言及した芭蕉のこの時期の諸問題とこの「俤や」の句に備わっている手法等を考えてみれば、いくつかの問題が把握できるように思う。

まず、名所の句の詠み方に関して、一つの方法の確立があったことが指摘できる。すでに「〔近江・美濃路紀行〕の世界」[注5]で触れたように、「さみだれにかくれぬものや勢田のはし」が、近江八景を利用しての名所の本意の表現を目ざしたものであったということと、この「俤や」における芭蕉の「姨捨の月」の本質にせまろうとする句

作の態度は、実は軌を一にするものだったのである。[注6] そしてそこには、風景の美、風光の清意に、道体のあらわれ、天理の流行を体得しようとする芭蕉の生き方そのもの、俳道建立を目差す新たな芭蕉の姿が生まれようとしていたのである。更科の旅が、『おくのほそ道』の旅へつながっていく必然性は、ここにあったといってよかったのである。

最後に、『更科記行』の問題に戻れば、前半の文章部と発句群殊に「俤や」の句とが乖離してしまい、俳文「更科姨捨月之弁」も、芭蕉が手を加えれば加えるほど発句「俤や」をきわだたせてしまう形になってしまったのも、この時期の芭蕉が、名所の句の方法をめぐってひたむきな探究を行っていたことの証明となりうるわけで、『更科記行』の文章部と発句群とが一つにまとめられるという可能性は、望むべくもなかったといわねばならなかったのである。

注1　引用は、九州大学中央図書館蔵、明和九年刊本による。

2　『歌林樸樕』「ヲハステ山」の項に「大和物語ハオイノ男ステ、無名抄ハメイナリ。物語ハムカヘテカヘリ、是ハステヽヤミニケリ。（中略）オイニテモ、メイニテモ、ステタランヨ、ヲバステ山ニテル月ヲミテトハ不可レ詠欤。（中略）サリトテハ此歌後人ノヨミタル歌ナルベシ。オイガヨミタル歌トハキコエズト門弟衆ヘモ披露セシニ、其夜ノ夢ニ、定家卿、丸ニ物語（大和物語……筆者注）ノ説ニ付ベシ、後ノ人ノヨミタル歌トミルハアシヽ明ニヲシヘタマヒシマヽ、又門弟衆ヘ此由告シラセ侍ル」とある。引用は日本古典全集　昭和六年刊による。

3　引用は、金沢古典文学研究会編集『謡言粗志上』平成元年三月刊による。

4　引用は、今便宜注3の『謡曲粗志上』によった。

5　拙稿『連歌俳諧研究』76号　平成元年三月。

6　其角が『雑談集』において、「五月雨に隠めものや勢田の橋」と「俤や姨ひとり泣ク月の友」を並べて、一連のものとして評論した意味もここにあったのである。